

第3章

明石市の歴史文化の特徴

1. 明石市の歴史文化の特徴

本市の歴史文化の特徴は、

①播磨灘に面する地勢により育まれた生業の歴史文化、②古代の足跡を語る歴史文化、③明石城下に花開く歴史文化、④海の道・陸の道の歴史文化、⑤近代明石を牽引した歴史文化、の5つのテーマに導かれる。これらのテーマを創発した明石市の歴史文化の特徴は、

「明石海峡を望む大地を舞台に、古代から近代まで連綿と続く

ものづくり、城づくり、町づくりに関わる町衆が築き上げてきた歴史文化」となる。

2. 地域別に見た歴史文化の特徴

明石東部地域、西明石地域、大久保地域、魚住地域、二見地域の5つの地域は、それぞれ、その地勢を活かした漁業や農業、酒造業などの生業、寺院跡などの古代遺跡、城下町の町割りや遺構、街道筋などの陸の道や漁港を中心とした海の道などに関わる歴史文化を残し、近代以降も子午線が通る「時の町」、「文化の町」として、地域毎の特徴を今に伝えている。

そのなかでも明石東部地域は、明石城を中心とした城下町に関わる歴史文化遺産のみならず、生業の歴史文化や古代の足跡、海の道・陸の道の歴史文化、近代明石を牽引した歴史文化など複層的な歴史文化を今に伝える地域である。

第3章 歴史文化の特徴

1. 明石市の歴史文化の特徴

本市では、播磨灘や明石海峡及び段丘などの地勢、新田やため池などの風土を基盤として、特有のまちづくりやものづくり、人々の営みが長い時間をかけて蓄積されてきた。また、漁業などに関わる特徴的な文化的景観や城下町などの町並み、酒造業などの生業、布団太鼓などの祭礼は、本市の歴史文化遺産として今も継承されている。

これらの風土、地勢、町、人の営み、歴史文化遺産で形成される本市の歴史文化の特徴は、下図に示すように、①播磨灘に面する地勢により育まれた生業の歴史文化、②古代の足跡を語る歴史文化、③明石城下に花開く歴史文化、④海の道・陸の道の歴史文化、⑤近代明石を牽引した歴史文化、の5つのテーマに導かれる。さらにこれらのテーマを創発した本市の歴史文化の特徴は、下記に整理される。

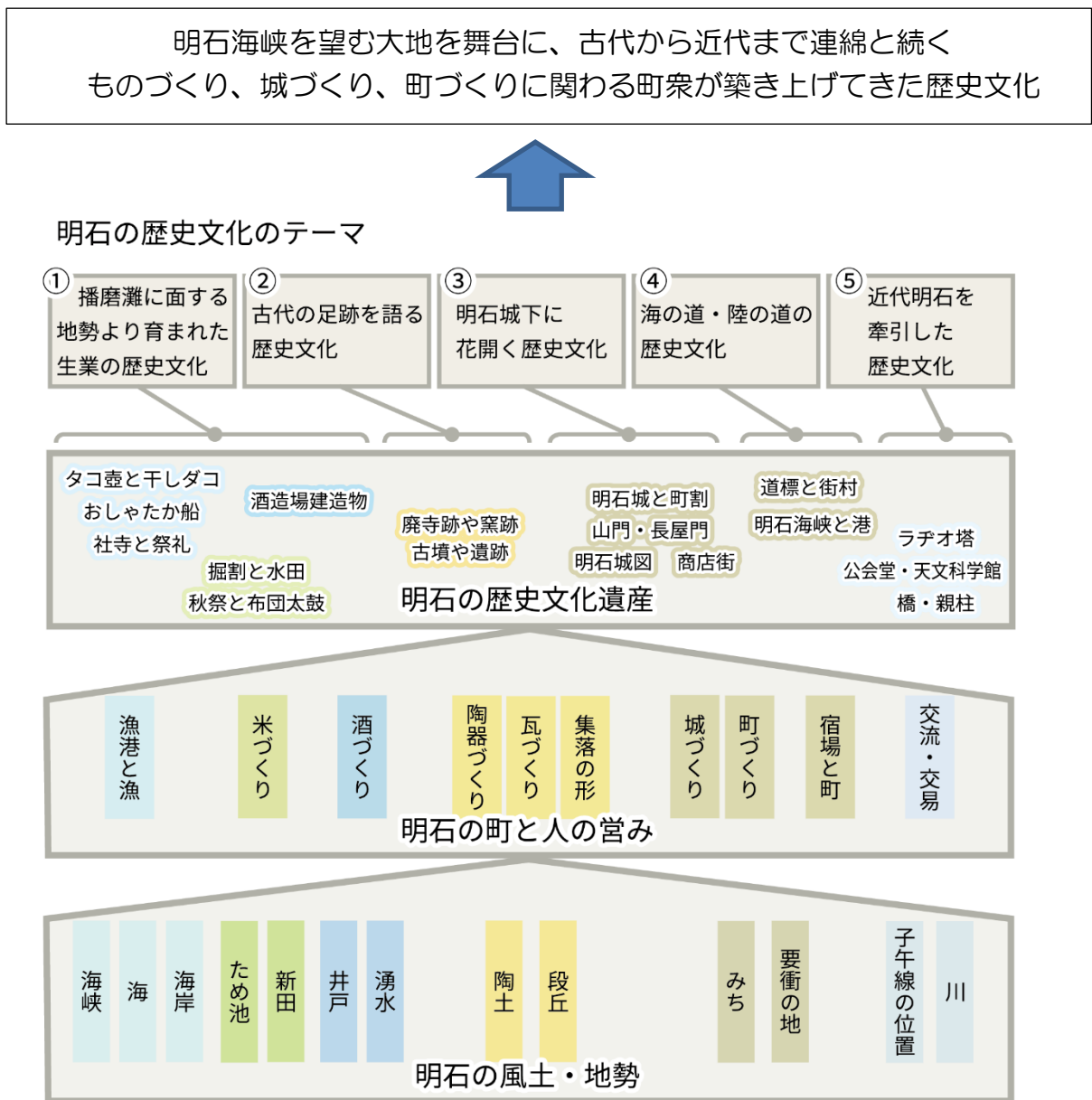


図3-1 明石市の歴史文化の特徴

(1) 播磨灘に面する地勢により育まれた生業の歴史文化

本市は目の前に広がる海、台地に広がる農地と新田開発で築かれたため池や掘割、段丘崖から湧き出る水などによって、古くから多様で豊かな生業が育まれてきた。

海の恵みとの関わりについては硯町遺跡^{すずりちょういせき}から出土した飯蛸壺が物語っている。こうした海との関わりは、漁港で水揚げされる魚介類の新鮮さと豊かさ、海上安全と漁業繁栄の神である祠が残る町割り、干しダコの風景などからも、古くより連綿と現在につながっている海の生業にまつわる歴史文化を感じることができる。

一方、旧明石郡で生産されている「谷米^{たにまい}」と呼ばれるコメと大久保町周辺で湧き出る「寺水」などの水が明石の地で江戸時代以降、酒造業を発達させた。明治時代になっても27軒、2万石近くの酒造りが続いており、現在も江井ヶ嶋酒造をはじめ、市内では6社の酒づくりが操業している。コメは、江戸時代以降、新田開発が盛んに行われ、大久保町などに広がる水田、掘割やため池によりコメの増産に努めた様子が林崎掘割渠記碑^{はやしざきほりわりきききひ}や庄内掘割、寛政池紀功碑^{かんせいいげきこうひ}で読み取れる。また、野々上の田中家住宅や岩佐家住宅は明治時代以降の典型的な農家の様式を示している。

さらに、高丘古窯跡群^{たかおかこようあとぐん}にみられるように古代から丘陵上部で窯跡が確認されている本市では、戦前までは海岸沿いに多くの瓦工場があった。

人々の暮らしにまつわる祭礼としては、無病息災を祈願する「茅の輪くぐり」神事、播磨の歴史文化を代表する布団太鼓を用いた秋の祭礼、地蔵巡りなどは今も地域で継承されている。特に林崎漁港の旧林村では、路地をはさんで顔をあわせるチョウ（丁、町）ごとの地縁による漁撈^{ぎょうろう}集団と祭祀^{さいし}集団が一致しており、子どもの成長や地域の人々の生活を見守る地蔵も町内ごとに祀られている。

このように、明石の海や農地、ため池や豊かな湧水、丘陵の粘土層に育まれた漁業、農業、酒造業、瓦づくりなどの生業は本市の歴史文化の大きな特徴となっている。

播磨灘に面する地勢により育まれた生業の歴史文化の構成遺産

海：硯町遺跡・赤根川遺跡（飯蛸壺の出土）、岩屋神社、各地域の住吉神社をはじめとした神社、巾着網記念碑、おしゃたか舟、藤江の的射、二見の干しダコ

尾上（てる予）邸、尾上（清茂）邸、増本邸

野：大久保町等の水田、安達邸、丸尾邸（農家）、小山邸（庄屋）、山の神、清水のオクワハン

井：茨木酒造、江井ヶ嶋酒造、太陽酒造、亀の水、弘法大師の霊水、アン（庵）の井戸、吹き出し井戸である「どっこんしょ」推定場所、卜部邸、原邸

池：林崎掘割渠記碑、庄内掘割、17号池、大道池などいなみ野のため池群と水利施設

祭：茅の輪くぐりの神事、布団太鼓などの祭礼、地蔵と地蔵巡り

等



林崎漁港



尾上（てる予）邸
(明石郷土の記憶デジタル版)



林神社茅の輪くぐりの神事

(2) 古代の足跡を語る歴史文化

本市域の大部分が標高 20m前後の「いなみの台地」とよぶ中位段丘面と明石川などの下流域の小規模の沖積地で構成され、平野と台地の南端部に古代の足跡を語る遺跡が分布している。

先史時代には、今から 200 万年前に生息していたとされるアカシゾウ（アケボノゾウ）やシブゾウ（シカ的一种）の化石が発見されている。

さらに、旧石器時代の遺跡である西脇遺跡や藤江川添遺跡、縄文時代の藤江出ノ上遺跡、弥生時代の上ノ丸遺跡、古墳時代の藤江別所遺跡および幣塚古墳や赤根川金ヶ崎窯跡、奈良時代の硯町遺跡や太寺廃寺跡などの発掘調査が進められ、旧石器時代のナイフ形石器や縄文時代の埋設土器、古墳時代の角杯形土器や奈良時代の飯蛸壺などが出土している。特に藤江別所遺跡からは、古墳時代の車輪石（石でつくられた腕輪）、9面の銅鏡など、豪族の存在を物語る遺物が出土している。

また、明石川左岸の段丘上に白鳳から奈良時代にかけて建立された太寺廃寺がある。現在は天台宗高家寺境内の南東隅に塔跡が存在する。塔跡は兵庫県の指定文化財に指定されているが、平成 30（2018）年 11 月から塔跡の修繕工事を行い、基壇の縁や雨落ち溝のラインも明らかになっている。加えて、海に面した本市では、和銅 8（715）年頃に編纂された『播磨国風土記』逸文に仁徳天皇の時代に明石駅の近くに生えていたクスノキで船をつくって難波まで水を運んだという説話があり、明石駅の近くに港があったことが想定できる。

中尾川、赤根川流域には平安時代から鎌倉時代にかけて、こね鉢などの須恵器を焼く窯が数多く築かれていたことが発掘調査によって明らかにされている。また、行基が建立したとされる天平 12（740）年の建立とされる延命寺、天平 16（744）年の建立とされる長楽寺などの寺院も赤根川下流に点在し、古代の宗教空間を彷彿させる。

このように、遺跡や古墳、遺物などは、古代に明石の地で展開した人々の営みの様子を物語っている。

古代の足跡を語る歴史文化の構成遺産

先史：アカシゾウ発掘地、「明石原人」発見地、屏風ヶ浦海岸

遺跡：西脇遺跡（旧石器時代）、藤江川添遺跡（旧石器～江戸時代）、藤江出ノ上遺跡（縄文時代）、上ノ丸遺跡（弥生～古墳時代）、硯町遺跡（奈良時代）、太寺廃寺塔跡（奈良時代）、赤根川遺跡（奈良時代～平安時代）、大蔵中町遺跡（瓦積みの井戸）

古墳：幣塚古墳（古墳時代前期）、カゲユ池古墳（古墳時代後期）、寺山古墳（古墳時代後期）

窯跡：藤江別所遺跡（縄文時代）、赤根川金ヶ崎窯跡（古墳時代）、高丘古窯跡群（奈良時代）
魚住古窯跡群（平安～鎌倉時代）、窯跡等からの出土品（明石市立文化博物館蔵）

遺物：石器、土器、飯蛸壺、製塩土器、瓦など（明石市立文化博物館蔵） 等



アカシゾウ発掘地
(明石観光協会)



カゲユ池古墳
58



行基が建立したとされる長楽寺

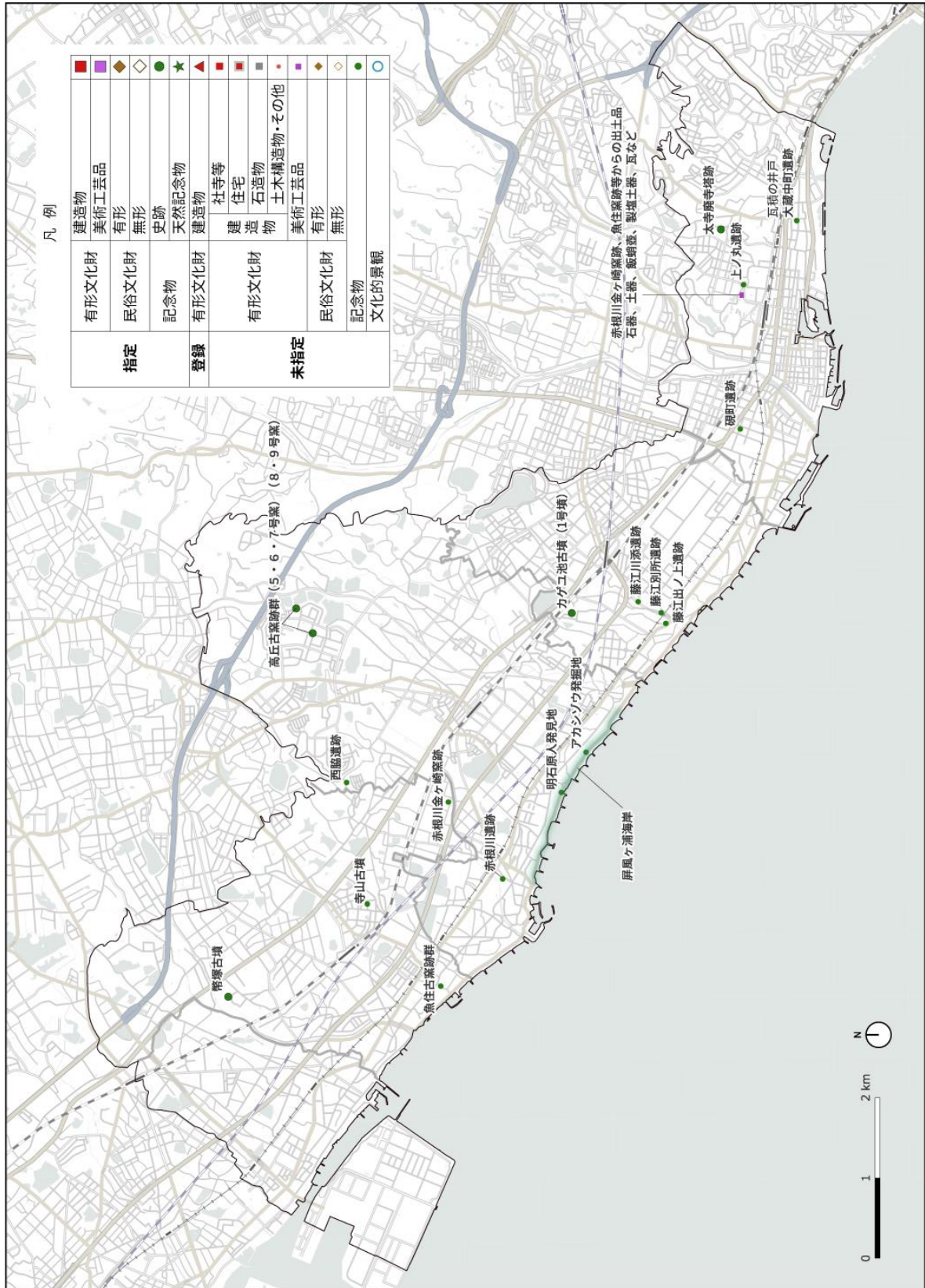


図3-3 古代の足跡を語る歴史文化の構成遺産

(3) 明石城下に花開いた歴史文化

本市の東部地域は古くより、東西交通、南北交通が交差する地域であったため、戦いの舞台となることも度重なり、城や砦が築かれた。

東西交通の要衝であった本市東部地域が城下町として発達するのは、近世からである。

天正 13 (1585) 年には高山右近が船上城と城下を整備したが、町中の道が鍵型に折れていることや浄蓮寺、専修寺などの寺院が東西に並ぶように所在しており、敵を意識して備えてきた城下町であったことが今も伺える。

江戸時代になると、元和 3 (1617) 年に明石藩が設けられ小笠原忠政が初代明石藩主となって、西方への守り、東西交通・交易の拠点となる明石城下を整備した。小笠原忠政は明石城下と港の建設に着手し、明治に入るまで、明石城の城下町として多様な文化が花開いた。

現在も明石城切手門が月照寺山門として移築されている他、明石城は巽櫓と坤櫓が国指定の重要文化財としてその威容を誇り、国史跡明石城跡は、明石公園として市民に親しまれている。

また、今も残る高家寺本堂は小笠原忠政によって再建、住吉神社は忠政が建立・寄進したとされ、第 8 代藩主以降の松平家の廟所や松平家の家老であった織田家長屋門などからも、明石の城下が築き上げ、現代にもつながる歴史文化をみることができる。

さらに、小笠原忠政は、城下町の東部を商人と職人の地区、中央部を東魚町、西魚町など商業と港湾の地区、西部は樽屋町、材木町とその海岸部には廻船業者や船大工などと漁民が住む地区という町割りがなされたが、その東魚町、西魚町にあたるのが現在の魚の棚商店街の原型になる。

城に近い一等地に魚町が置かれていたことから、当時から、本市では魚が重視されていたことがわかる。元文年間 (1736~41) には東・西魚町で鮮魚店が 56 軒、塩干物店が 50 軒あったといわれる。このように明石海峡や播磨灘で獲れた鮮魚の売買は、町の賑わいにつながり、その賑わいは今も本市の食文化を形づくっている。

明石城下に花開いた歴史文化の構成遺産

城 跡：明石城跡、明石城巽櫓と坤櫓、船上城跡

藩 主：旧明石藩主松平家廟所、高家寺本堂、月照寺山門、織田家長屋門

武家との関係：本松寺、柿本神社、和歌文化

城下町：鍛冶屋町の町家、中堀、かつての太鼓門等の場所

絵 図：「明石城御殿平面図」、「播磨国明石城図」(明石市立文化博物館蔵)

食文化：魚の棚商店街、玉子焼、タコ・タイなどの魚類

工芸品：明石城太鼓 (明石神社)、緋緘金小札胴丸具足・明石焼 (明石市立博物館蔵)



月照寺山門



織田家長屋門



柿本神社

(4) 海の道・陸の道の歴史文化

明石は古代より中国大陸や朝鮮半島の文化の中継地であった九州北部と日本の政治・文化の中心地である畿内の中間に位置していることから東西交通が盛んであった。また、明石海峡に面して、海の往来も活発であった。

奈良時代には都と大陸文化の玄関口である大宰府を結ぶ古代山陽道が本市域を通過している。古代山陽道は幅員が10m以上もあり、沿道には約30里(16km)間隔で瓦葺きの駅家が設けられていた。本市では二見町福里で古代山陽道跡が確認されており、道幅は古代には14mであったが、後に9mになったと想定される。現在、二見町福里の稗沢池の中を東西に走る堤防は、古代山陽道の痕跡であると推定されている。

さらに魚住町の長坂寺遺跡では兵庫県立考古博物館による地中レーダー探査の結果、地下に人為的な直線区画があることがわかった。現地に残る田の区画と合わせ、一辺約80mの正方位を向く方形区画が復元でき、古代山陽道の駅家「邑美駅」跡であることも明らかになった。

海では、古代には摂播五泊の一つである魚住泊が設置され、中世には重源上人が魚住泊を修復するなど、港は海の道の重要な拠点であった。また、柿本人麻呂が謳った明石海峡の風景などの「名所」が歌碑と共に、今もその姿を留めている他、林崎・松江や大蔵海岸は海水浴場として、市内外からの誘客をみている。

江戸時代に入ると、本市域では、大蔵谷や大久保、清水(長池)が宿場として栄え、大蔵谷宿場筋跡、大久保本陣跡周辺、旧西国街道沿いの服部邸では街道筋の雰囲気は今も残している。

また、海の道では旧波門崎燈籠堂や二見港の「ほうけん塔」など港に造られた構造物が海峡の往来を今に伝えている他、「明石型生船」の資料も収集・保存されている。さらに、明治時代には、明治天皇の山陽道巡幸に関連する遺跡として、明治天皇明石行在所跡や明治天皇大久保御小休所跡が残されている。街道の風情を今に残す大蔵谷では、獅子舞や囃口流しなどの無形民俗文化財のみならず、町内の地蔵盆が今も継承されている。

このように海の道の拠点である港、古代山陽道からつながる街道の町並みや人々が往来した道筋に残る道標と共に、明石の地の「海の道・陸の道」の歴史文化を今に伝えている。

海の道・陸の道の歴史文化の構成遺産

海の道の拠点：江井ヶ島港、明石港、魚住港、二見港、林崎港、旧波門崎燈籠堂(石積)、
明石型生船

陸の道：古代山陽道跡、長坂寺遺跡、高砂道、太山寺道道標

町並み：大蔵谷宿場筋跡の町並み、大久保本陣跡周辺の町並み

建築物：服部邸(旧西国街道沿い)、大塩邸・卯月邸(旧西国街道南側)

遺跡：明治天皇明石行在所跡、明治天皇大久保御小休所跡

祭礼等：大蔵谷の獅子舞、囃口流し、牛乗り、地蔵盆

文学：柿本人麻呂に謳われた名所(明石海峡の風景等)、人麻呂の歌碑



卯月邸



大塩邸
62



江井ヶ島港

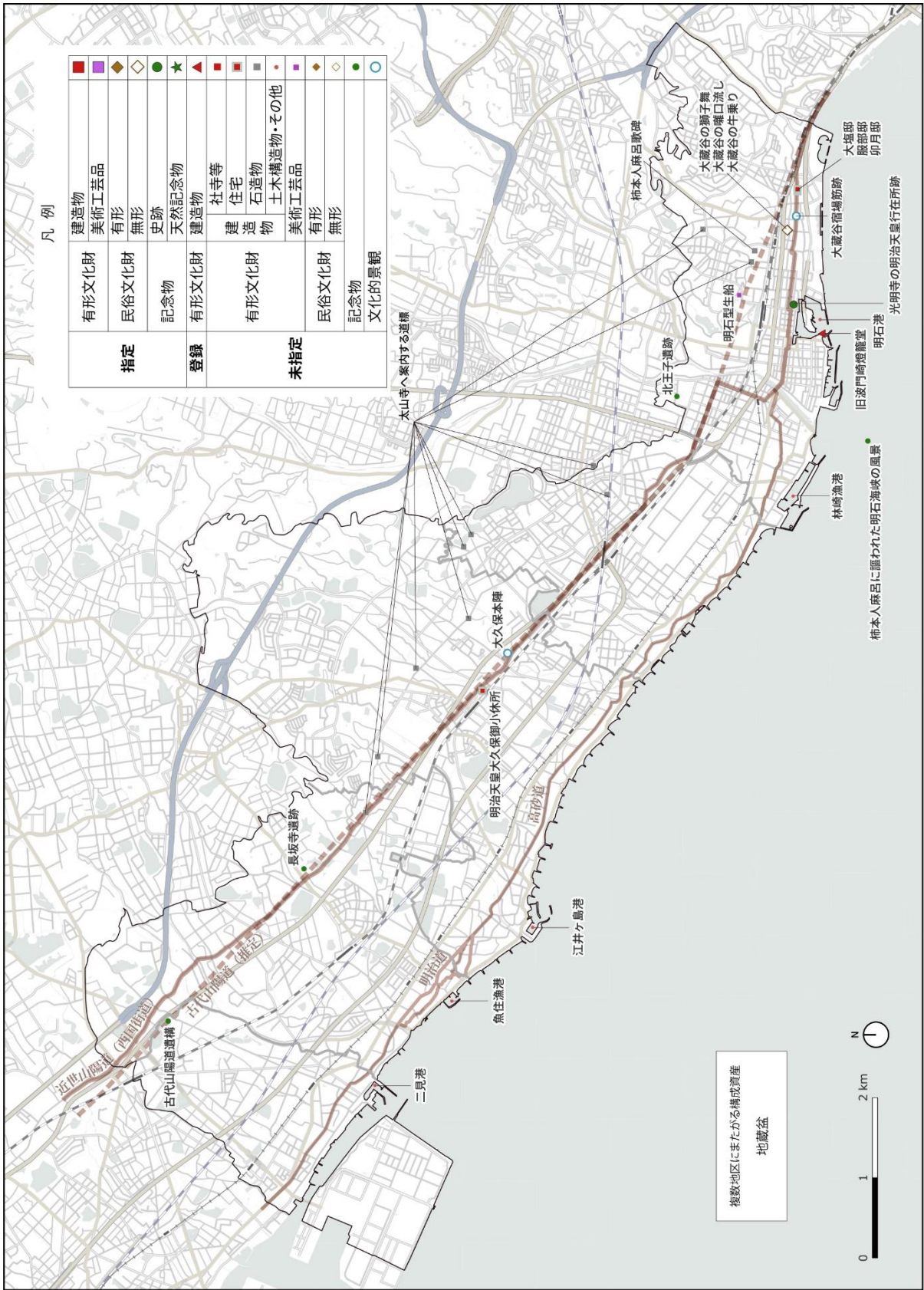


図3-5 海の道・陸の道の歴史文化の構成遺産

(5) 近代都市明石を牽引した歴史文化

幕末から昭和初期にかけて欧米の制度や技術、文化が盛んに取り入れられ、日本の近代化が進んできたとされている。

本市の近代化の象徴が日本標準時の制度の導入である。明治 43 (1910) 年には相生町に「大日本中央標準時子午線通過地識標」が建てられたが、大正 4 (1915) 年に東京天文台の経度が修正され、改めて昭和 3 (1928) 年に現在地に移された。その後、月照寺前には「子午線標示柱」が建てられ、子午線のまちとしての本市を象徴している。また、明治 21 (1888) 年の山陽鉄道の開通は、本市の近代を牽引した原動力となったが、大久保駅では、集落を南北に分断する位置に設置されたため、赤レンガの大久保マンボが造られ、今も「穴門」と呼ばれて親しまれている。また、大久保駅では、跨線橋に付けられていた「大正 2 年横河橋梁製作所」と刻まれた鉄の支柱がプラットホームに、構造部材がロータリーの時計台の支えとして残されており、当時の技術水準の高さを今に伝えている。

近代には、また、文学などの分野でも本市が注目された。明治の文豪である夏目漱石が柿落して講演を行った中崎公会堂、太平洋戦争末期に永井荷風が東京から疎開していた大蔵谷宿場町のなかに立地する西林寺、橋本関雪ゆかりの白沙荘などは今もその姿を留めている。

本市では近代からの住宅都市としての歴史文化を今に継承している。人丸地区や太寺地区周辺は住宅建設が進み、昭和 2 (1927) 年には本市で初めての土地区画整理事業が進められた。現在も、昭和初期の和館の母屋に洋館風の附属屋がつけられた様式の住宅が残されている。また、大久保町の加護谷裕太郎設計の洋館住宅も近代の本市の繁栄を物語っている。

また、江戸時代からにぎわっていた魚の棚商店街は昭和 24 (1949) 年に火事で大部分が焼失し、その後、昭和 36 (1961) 年にアーケードが完成して現在の魚の町・明石の歴史文化につながっている。本町通では、大正時代に演芸場「三白亭」、昭和時代に映画館「本町日活」を経て、大衆演劇場「ほんまち三白館」が再生されている。さらに、近代以降に興隆した工場のなかにも、工場内に船用発動機に関する資料室を設けている事業所や漁船の修理の事業所も見られる。

さらに、近代以降の本市の歴史文化を物語る小学校建築も残されている。

近代都市明石を牽引した歴史文化の構成遺産

子午線：子午線標示柱、天文科学館・プラネタリウム

公園・道路等：県立明石公園・中崎遊園地、大久保隧道、旧大久保跨線橋支柱

建築物：中崎公会堂、西林寺、白沙荘

住宅地：人丸地区や太寺地区の住宅、洋館付き住宅、安藤家洋館

商店街：ほんまち三白館、魚の棚商店街

工場等：阪神内燃機工業株式会社資料室、新明町神明マリン

教育：長楽寺（明石最初の郷学校として開校）、神戸大学附属明石小学校



子午線標示柱



中崎公会堂



ほんまち三白館

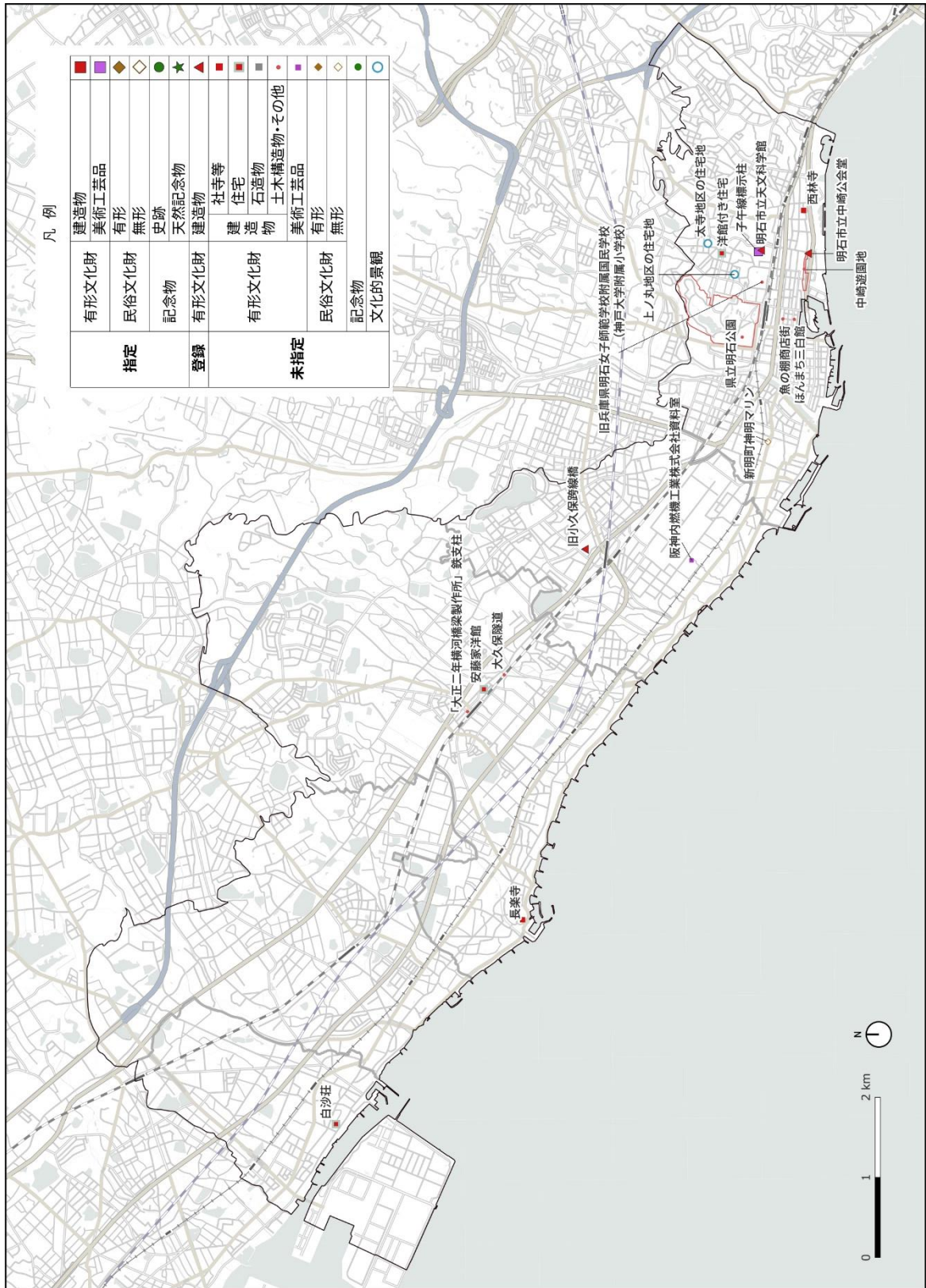


図3-6 近代明石を牽引した歴史文化の構成遺産

2. 地域別にみた歴史文化の特徴

(1) 明石東部地域

明石東部地域は、明石城跡を中心に多くの歴史文化遺産が集積する本市の歴史文化を伝える地域である。

「明石城下で花開いた歴史文化」に係る国指定史跡である明石城跡を中心に、明石城巽櫓などの重要建造物、市指定建造物の月照寺山門や織田家長屋門などが旧城下町の風情を醸している。

また、「近代明石を牽引した歴史文化」を代表する国登録建造物の明石市立天文科学館、中崎ラヂオ塔、明石市立中崎公会堂などの歴史文化遺産のみならず、江戸時代から続く「魚の町明石」を代表する魚の棚商店街が立地し、市の歴史文化の中心地域であったことがみてとれる。

一方、「播磨灘に面する地勢により育まれた生業の歴史文化」に係る市指定民俗文化財の「明石浦のおしゃたか舟」、未指定の歴史文化遺産の巾着網記念碑や飯蛸壺が出土した硯町遺跡などは、古代から近世、近代を通じて、漁業を中心とした生業の歴史文化を語っている。

さらに、「古代の足跡を語る歴史文化」に係る歴史文化遺産としては、弥生時代の上ノ丸遺跡や奈良時代の太寺廃寺塔跡などから、明石東部地域は、古代から人々が集住していた地域であったことを示している。

「海の道・陸の道の歴史文化」についてみると、市指定建造物の旧波門崎燈籠堂（石積）、現在も活気ある林崎漁港、明石港などの海の道に係る歴史文化遺産や、旧西国街道沿いの景観重要建造物である大塩邸、県指定の大蔵谷の獅子舞ほかの無形民俗文化財が継承されており、街道筋の歴史文化を今に伝えている。

さらに、明石市立文化博物館は、明石藩^{あかしはんじしめんきょじょう}地子免許状などを所蔵するほか、三十六歌仙絵及び和歌色紙などの美術工芸品を寄託されており、本市の歴史文化を伝える拠点となっている。

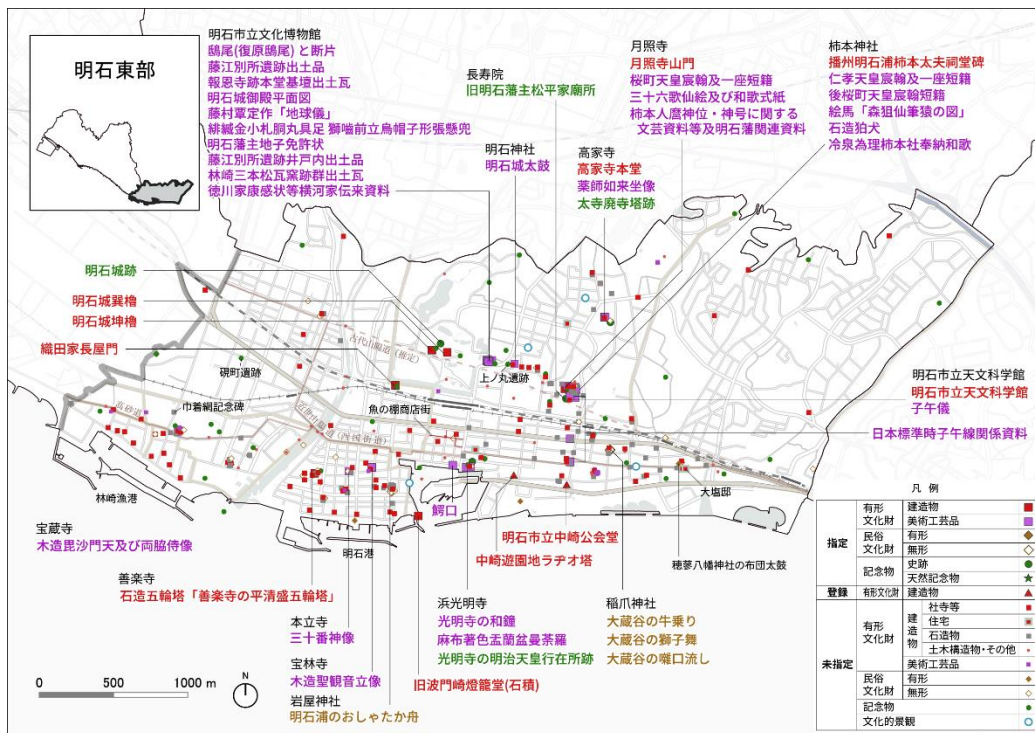


図3-7 明石東部地域の歴史文化遺産の分布

(2) 西明石地域

西明石地域は、山陽新幹線開業後、都市化が進んでいる地域である。

「播磨灘に面する地勢により育まれた歴史文化」に係る市指定史跡の林崎掘割渠記碑や明治時代に建てられた国登録文化財の農家住宅である岩佐家住宅などから丘陵部を中心に新田開発により農業が発展してきた地域であることを今に伝えている。

また、悪霊を払って豊作と豊漁を祈る市指定無形文化財の藤江の的射や、秋祭りの象徴である和坂の布団太鼓、鳥羽八幡神社の布団太鼓、藤江の布団太鼓などが現在も地域内で継承され、本市の生業の歴史と活発な祭礼行事の継承を示す歴史文化といえる。

一方、西明石地域は94件の未指定の歴史文化遺産を数えるが、そのなかでも風俗慣習が27件と多いことが特徴である。

このように、西明石地域は、新田開発により農業、漁業を中心とした生業の歴史文化遺産を残す地域であり、近年、都市化が進展しているものの、市指定史跡のカゲユ池古墳のように「古代の足跡を語る歴史文化」や国登録建造物である明治時代のドイツ製鋼製単桁橋である旧小久保跨線橋（公園の遊歩道として移設）などの「近代明石を牽引した歴史文化」なども継承され、複層的な歴史文化を示す区域である。

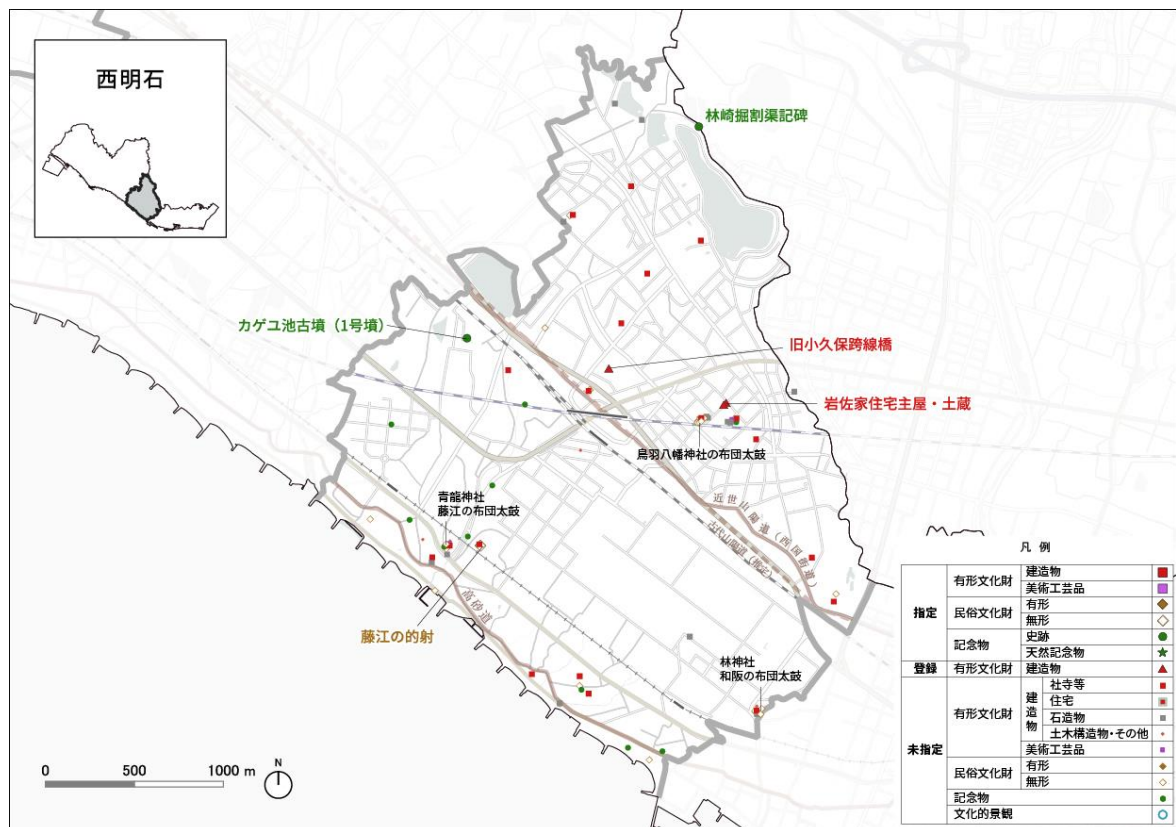


図3-8 西明石地域の歴史文化遺産の分布

(3) 大久保地域

大久保地域は、本市の中央部にあり、丘陵部から海岸部への距離が最も長い地域である。

「播磨灘に面する地勢に育まれた生業の歴史文化」に係る西講中ならびに東講中の布団太鼓、谷八木ならびに八木の布団太鼓など、秋祭りの象徴である布団太鼓が今も地域のなかで継承されている。また、吹き出し井戸である「どっこんしょ」の推定場所や「庵の井戸」など、水の少ない本市のなかで、農業に欠かせない水場を残すことが特徴となっている。

海岸では、江井ヶ島港ならびに周辺の集落の住吉神社などは、本市の漁業に関わる歴史文化遺産を残す地域である。

「古代の足跡を語る歴史文化」に関しては、海岸沿いの「アカシゾウ」発掘地や「明石原人」発見地など先史時代や赤根川遺跡などの古代の歴史文化を示している地域であることが特徴である。また、大久保地域は、良質の粘土と燃料となる山林資源が豊富な地であったことから、奈良時代には寺院造営に関連して須恵器とともに瓦を焼く窯も多くつくられ、県指定の高丘古窯跡群が本市のものづくりの歴史文化の起源を今に伝える。

「海の道・陸の道の歴史文化」に関しては、行基が造ったとされる「撰播五泊」の一つである魚住泊があったと想定されている。また、旧西国街道沿いの大久保本陣跡や明治天皇大久保御小休所跡などが、海辺の高砂道沿いには道標なども残り、人々の往来が明治期まで活発であったことが見て取れる。

大久保地域は明石東部地域に次いで未指定の歴史文化遺産が 153 件と多い。そのうち、建造物のうち神社が 18 件、石造物が 45 件と多いことが特徴である。このように、大久保地域は、丘陵部から海岸部にかけて、農業、漁業、ものづくり、街道を通じた交流の歴史文化をつないでいることが特徴である。

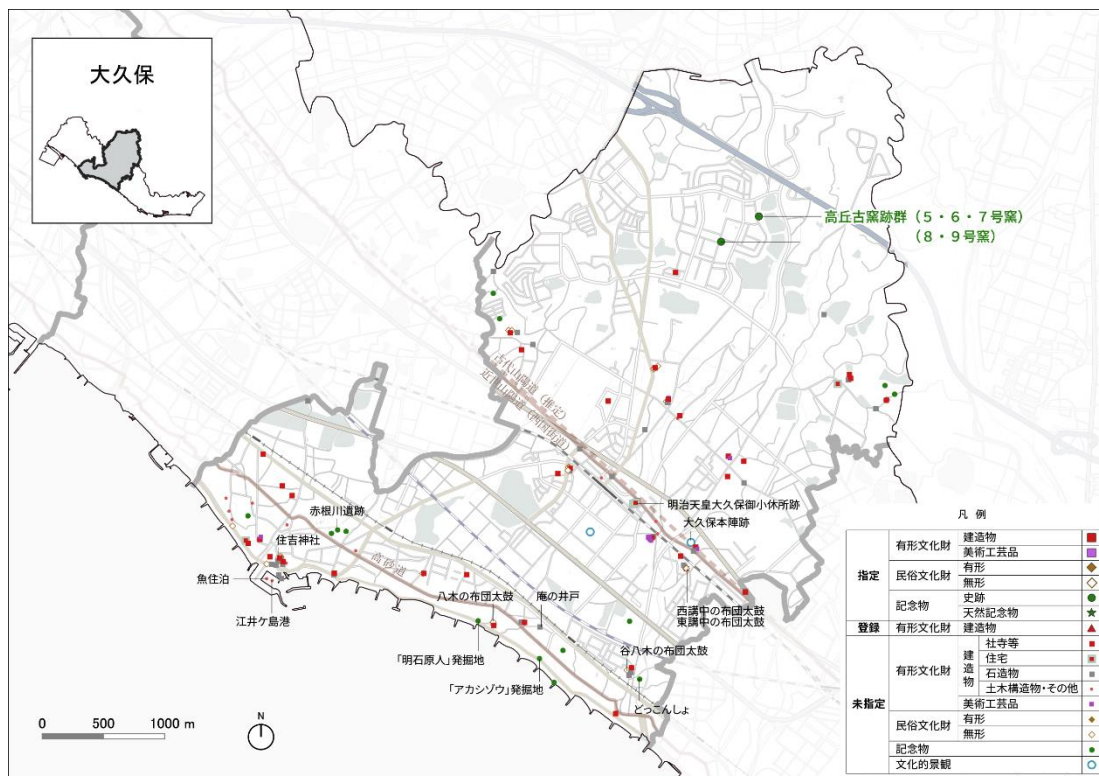


図3-9 大久保地域の歴史文化遺産の分布

(4) 魚住地域

魚住地域では、大半が多段の段丘で構成される地域で、古くより段丘の崖を利用してため池がつくられた地域である。

「播磨灘に面する地勢に育まれた生業の歴史文化」に関わっては、ため池や掘割の築造により農業を発展させ、段丘崖からの清水の利用により酒造業を発展させてきた地域である。また、海に向けて広がる空間構成を有する住吉神社は漁業との深い関わりを今に示している。

また、本地域では桑の木で作った鍬であるオクワハンを4人で持って上流の水の取り口まで歩く「清水のオクワハン」をはじめとして古くからの人々の営みを知ることができる祭礼などが良好に継承されている。

「古代の足跡を語る歴史文化」に関わっては、旧石器時代の西脇遺跡、寺山遺跡、古墳時代の寺山古墳石室や幣塚古墳から出土した埴輪などが古代から続く人々の営みを伝えている。

「海の道・陸の道の歴史文化」に関しては、古代山陽道の駅家であった「邑美駅家」に該当する長坂寺遺跡が残されており、奈良時代以前から、海と陸の道を介して、交流の文化が発達した地域であるといえる。

特に、住吉神社の石造燈籠や楼門、能舞台などの指定文化財や茨木酒造などの登録文化財は本地域の歴史文化の特徴を示すものである。

このように、魚住地域は、古代から人々が住み、街道を通じて交流を図り、段丘地形を活用して農業や酒造業、窯業に関わる歴史文化を特徴とする地域である。

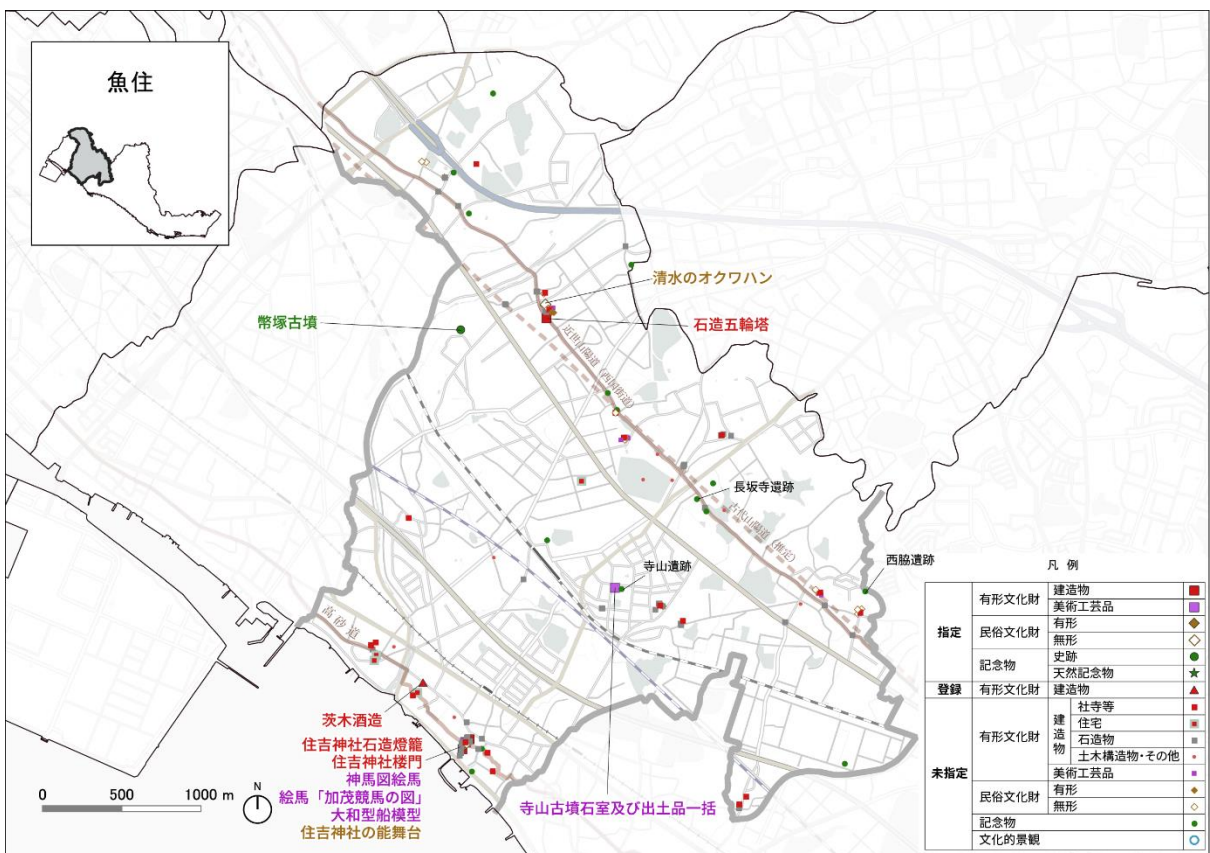


図3-10 魚住地域の歴史文化遺産の分布

